扶桑拾葉集

廿五廿六

扶桑拾葉集卷第二十五

目錄

快祐清印七回忌和歌序　菅原公夏
世諺問答跋　菅原兼冬
祕抄序　菅原公條
七十賀和歌序　同
三塔巡礼記　同
高野山參詣記　同
石山月見記　同

大曜文庫

武蔵野紀行

平氏康

快葉拾葉集巻第二十五

参議従三位兼行右近衛權中將源朝臣光圀編集

快祐法印七回忌和歌序

藤原公夏

書写山寺ハ快祐法印と同日ニ住侶なり既
密西学る雲をあらしふ月の玉かりを屋上
ハ松ハ絵数三昧ハ寒をしはきてハ雪降
を床のほとりまつむ姜鳥風月の興にふ
かりて重衆ハ小こりましまぬんをもてひ
吾手に松の冥加を拾へ里彦明の曲殊勝
なりされとも奥山の風をうつす筆法の

乃親向うゐひなく法仏佛陀の輝院をの
ミ有とのとや聖灵さるめく十万億古乃
函を経過して蓮眼果唇は相好り頭眼
し七千万歳乃院とまるほして梅咀祭
耶乃摩師に釈迦し給ふんとそ覚る
者は丘坂法帝とのまと知と手月と幸運
得るうへ彼供奉杉子乃笑をむまふ拝へに
と乃法華にまうて雅岡乃莚を守し
得ることありよまさく寅号一遍とかしらり
をきゝ首乃和歌を法ら称く新前にて
所へ得る風賊は此綺徳なるんうに薄法輪

乃周縁なる法ら先やいとしきと志りり
る なにはたりに父母も有うに拝みをれは
けり乃ふりさくやまの乃む
む むまひとくえに深うぬ姉弟也
たや七ら勢乃宇ふは磨けさ
あ 阿耨多羅ミ川は車のまれまれは
めくりあるへき菩提まうしむ
み ミ川ハ紀の徳にのこりくれしまひぬ
うさみにまりし墨そめ乃袖
た 幸のミまりしまう夕雲乃苔の下に
法ぶなり人の家の世をうし

ぬ

あえの言も神うちありし筆はもも
愛はてちは物なれも今年

世読問答波

菅原兼冬

右世読問答ハ後成恩寺禅閣乃かくし先
給はむとてみとりの紙にかくはしき筆
の跡を給し給ふとしてこれ見るかむ月の
そしめより芳水のみなりとはいふく八
ケ條を志るし給ひけるに其功給らさ
ましかハ目録のこと給ひて詞ハなし家に
地蔵の林にあそひて黒藻は塵をけく

むとりの童給りしりといへとも雪と何けむ
敬としてもいはむや磨れそうをたこし闕
そうを補いて故きとそう孫あらしれ
といつれハ因さしく先達のしわさなれとか
けるハ理髪か史記を理図か書けき芸武部
か源氏物語より大貳三位か宇治十帖をそへ
給りし事はなやうにん程とやうん中物
語等まて見給ひしことの思ひ出て給て
かれ目録の旨より經て正月七日の何けし
をのより十二月晦日の事に至るまて
うこそもなれあれ月れとくけをうきあつ

絶く賤かきく大れかゐのに世の流をわかち
たをむとをれるとなり

秘抄序

菅原公條

むかしいへる事あり杜征南顔秘書は丘明孟堅
の忠臣なりとかし卅二子ありて春秋漢書
の心明し世にはひろまれりける我國の至寶
紫式部か源氏物語は詞幽玄にして義理甚
深しとやいふへき家々に注尺は其のほかせり世
いへともいまた室にいらさるに似たりこゝに河
海鈔の世にとゝまれ花鳥餘情のいてきて
おのおのまちまちなり百年の闇室一炬の光明に
かへり且彼両抄は皆光源氏の忠臣なるへし誰人か
いふをあくもそおそれさらんやひそかにうくひ
にんかはあて且は婦女子の為童蒙のためにし
私をすゝめて人たちの見んことをくみて老眼の不審と
ちかきむとまを海くとよ大きれ光をさひれ水よ
うはそのよおかれしといへとも流を汲て源をしも
賢をとゝくひとしわすれぬとそおもふ

七十賀和歌序

同

凡賀といつれとは其年のみてはをかくへし

三塔順禮記

同

文永三年二月廿四日教院をたちて安
居院の辻子を東へ行一町ばかりゆけば
叡山三塔
南尾坂の北陣良純
法印の坊あり

此和尚の中みハ行りなるけぬるしを
を通ひたれ知ぬるなる事なりし其かけり
と知りひなしく漢の尾まつく風れよし
有しかハ俄に十二日巳刻いりに出さら
て西毎坂をのぼりぬきつとハ雲毎とかけ
ありや滅りし雲のそらいとゝ見えそり

楢溪三塔是西東　扶老攀縁途不窮
靄々雲生雲毎坂　山腰路轉有無中

かく西東塔南谷栄光傍宣祐法印の坊より
にきにより此坊ハ梶井文御留守にして
法印よりひ既に八旬にをよへ見此順礼先を

乃事中をしかハ至りまりて室の戸をも
かをとく固辞せられしとあるからに中
にれえいなひたてれ各信表の事ひとなり
法をもしられしと深く思ひそれといふし
て聞えけるまや和にのかの文をつゝ聚
おもしゆしかり今ハ神文山智にてれし
ましきれたり此の法ありこさも有ける
に然と至乃坂を金まけれんとしを感し
ゆれしめし字を何より和に思ひの御ふる
所にあまりたるとし中にあり日本の法物
法にり法印を見えぬくるゆると苦れ庵にて

中堂にいたりて山山の中集をきて京明
さけりて感嘆の あまり山家大師の所作
を見まひ出て其意よみ給へり
今そしれ無上正等正覚の
己か堂の松の法れ給をは
字にとらはなるまゝにしたゝ也
い西よりハ誰にもとめむ聞えくハ
己か立そ西りふきこれりを
拾きくて修禄か答に取りて笠なとも取
あへて苔風を字しく面ありやまさりを
れと法下ハ御もくるしみいるなほ字也

もなくして京都に出しくと授字給へるを見たり
又其意のよみれ
忘れめや西にあらしの峯つたひ
西にとの道はてとは京の路
西にとり見れるめもあやなれも
何にしもなさし法をあり西は
うきの志にもほそへつるかな
いよく西やまれ風吹かれをのく衣は袂を
とりて肩にうす雲の すそをかく字く腰に
かしみなとしてからうして横川にいたり宴
しにおまして おもしいハ恵心院にてあらはへき

よしさる免けるまへて此院も久しく退
轉をしを三光坊といふ人再興をりけるん
荘厳むかしにも越ぬへく見えしかるに人は
いふやう此苔れこなるは東塔の講堂なと
まてゆりひらく堂塔修造或は建立数を
しらせ功をなすとりといへ是あるは此人御
天下にをよはれ人をかるゝ中あへ是
講堂佛閣又鐘樓願力新成與孰儔
爭借二一山修造手國家顛覆万民憂
そのをしれ是ゝ立柱来記きくれ
今もむかしを御をなめしも

此ゆりひらく学者此坊乃ぬしなる三光坊
和乃苔かり講説ありとて留守所ふ法師
恵心僧都服恩乃河源院乃像於かませ給ふん
とくいれなる所みなるに等容等聞ことも
及ばれ学ふ家かりをしまくれ給ふは此佛像
こそ学ぬ面し面風乃さかり見佛乃なるら
世なりし明ぬれ八王寺より廿一社の
明礼志所にしくしくなるにつゝく鶴の
かまいぬなといふるみて帰京乃出をらし
かり長老神おまて称学何り
まうるのむ日よしのちかひなるへ

かゝるもおもひ給へしむ給乃とりし次

社頭へハ十五首奉納乃きめかの〇く一巻なり

まこと給ふり梶井宮よりなりけり紀巴法師

とりふ給り十五首をとりて給りて是も俄より

十五首をつゝ給ふりとりてしてなれりや

うく歌へのかりかきり給ふりしかれしかるり

所乃持ゝ居海ふまもむものゝ世のりしれ

みちむくまゝ給ふ山めくりして

詠十五首和歌

秋風

神のうへに給ふとるものとまゝ紀より

きれ嫁かせ也かつ〇ますりめ〇ん

秋露

嫁給ふ家ちに給ふ乃ゝ家給ふ志ゝ事也ゝ

あかれめくみ乃ゝ行ゝ其ゝ見をけり

秋月

月ハ行ゝ家のうち也明やまし

うほ給ふ新ハ見ゝしもゝ見ん

嫁雨

かゝくいふ事とはみゝ明いつれ

也ゝりつれ給ふ雨ゝりまれ

秋花

山ゟ見れ事ゝ乃ゝ葉ゟ見れ之後に
まくさ乃花ゟ手をつくしたる

秋鴈

いまはとゝ色つく小田にたつかりの
かりしかいつく所もきにかり

蝦虫

秋ゟしもまゝ枝ゟぬしの葉を
つゝ葉させて白出せしそしれ

秋鹿

雪ゟく風ゝつる葉をくゝみくや
山より麻乃出くるゝ音

秋夕

風まゝれ促乃柳　ちるゝ紙
江乃れきゝし舟ゟせく

秋霧

菊ゟいまをゝ海とゝせる夜ゟ
冬ゟそまりゝ霧ゟ時しれ

蝶祝

蝶ゟくゝ雨をむかひに動ゟ見
山乃まつゝ見世をまゝらるん

秋旅

風ゟみ雨ゟかりこゝも

さらに出てやうあこつる故に

秋意

起とり祢乃あしかさは思ひや秋
山とりの尾ぬなり夜ぬ森

秋思

秋のゝぬりひ乃ゝ秋さくつゝも
人りたれけぬ人ぬりやや

秋雑

きゝんもあれぬへまとなく猿ぬ
酒もらくられ木ぬゝ那

高野山参詣記

同

伊ふし年の好たりしてしらゝあしなき
あるとこたれきけくつき心ちも好きて
あたき遊行まもかゝらるゝやと好ひつゝ
さくゆきれしに紀巴とくけくたまゝ
志ねて此ころ都のすまゐし侍乗く
よりきゝきゝ元々志ゝも志ゝしゆの
金まとの國まく道あとくしらしたし
ぬくたれゝるへ紀りしいれなむかうさくも
とくへとりいひるゝ事もなくあむを
ほゝ保しぬ人宗見といふ人を見し

つまらとし天文廿二年二月廿三日の
わしるひたかり卿といふ人仰なれて思
ひつゝなりぬ
　石強かれよいとゆへあつまりやあまた
　よし野の山くさと平くろしぬ
鳥羽よりこつのみなもと守なりち
うきとしく水をせきいれて堤を
きはくてゐかしきたらぬしまゝ
そへいとまなれ代不絶頼しるゝ所なり
おそれなくしも稲もうるゝみゆなりき
水の害をまぬかるゝよし　夏兵の将助

とゆかりなりけり
　大ひなる池のほとり志井くかの
うち架し年の頃ものゝ
いにしへの小松なとといふところとて天神の
ありける里を知りたるとかや名乃
うへあける里よく聊りつれりかくとて
やなくらの泉川のあたりすゝすき柿の末
りけるとて
　春よめる小柿のをりもしかるをも
　さまくなるにまたみてきけるなる
なりけるて般若寺の文殊堂に立よりて

しまゐれくりの様のやうなり枝を
あらし覚也
廿四日まゐ日社に到れてくりさま
とうらく後を見ふるんたし然成る
なれくし神にてみりうれ
あらせ心ゆゑ神うさ
紹也
きちうへうるうれ
まゐ御神のいつも
まゐ御ゆゑ春の花なみ
賽後黙禱道中風雨難
雨後餘寒春包傲　白櫻末發野梅飛

天其一笠山三笠　為我龍神莫濕衣
ゐまより高雲のうちゐ羽かひの下り客養
るとくゆさしゐるさ人をとさ内く思
真を御くされ変かりなしかれ地藏
井の縁日なれ弘法大師建立の寺十
論院にいあまゐ石にまゐつきゐる佛井
歴しまして殊勝の景地なり屋かく真福ち
諸堂結縁し東大寺大佛殿をしれ
八幡にまゐり念仏堂今利頂戴し二月
堂にまゐりあるに雨すこし降て笠なと
とりよせてる知足院なとへまんりるやとも

より帰る事

廿五日にあるべき事に七日にあるべき事

聖廟御法楽にしりて内裏にまゐりし

にて此いとまゐりてさつらへさ事

終て

梅前先にあるべきにいささつら

かきにふさ庭の山か勢

紹巴

かなて一二句法中あひ道中にて百句

を終りさまさりさ姫の終りまゐる

しに定事のあるに此かへり風吹あまさる

紹巴

行神に河ゆきしさはひゆんの

かなこの衣を終にかさる事

此にあるに返事に

さは姫にしかさすとも言ふすに

そえまの日新衣りはさし

眉間にまゐりまゐりにいとさつら盛るか

紹巴

ぬきとめぬつ姫のまゐひは春かさ此ん

花にさつらの衣りしさ終て

此にあるしかん

いとりよれ名をくるゝ迄し花桜
うしろ影もぬきてとゝめむ
ゝるかれ物をまくみるゝ
あさみとりとと山肩の色かくみ
あとまくあまりそれなく
不退寺りいま聖高葉平日筆の新を
ゆかりさきりにひ給うさるよしかせと宗二
とくかのあらはしたるくまくよくいふよ
雖見せしに容顔の義舞鶴正なるうつ
のくりむかぬかきとし
まやむかしなりけるとしたるゝ

いたしやれふも世なるれもなき
是より法華寺海龍王寺超勝寺西大寺
よまつるとくかの遍昭の系よりかゝるとよめる
柳むかくみえんなりなり義りそくれやらく
菅原のふしまるいふれり菅蓋相降誕の
詠とくちいさき梅木なるとあるとくしゆんひ
きけしそうあとれ拓挽寺薬師寺大
安寺元興ちなと結縁し又宿所に帰りる
きるやつまるゝ望もたゝるゝ志の花をしよ
大乗院よりうちくきるつまくとゝつまきる
人ありかれは日花なるに取よまれまくあ

角くまいりて明りたるこの屋とりたる家あ
為しよりあらんまく二階をあらしくつく
事をしるあらやうなるをしてむかひみるは
伊弱山もまとるなりむかひ色りのかへよこの
花はきけり

春さしをしるしをしたれあつさゆえ
いこ内は雪もん花をあるなり

紹巴

玉をしる紙あらん伊弱のやまのたる紙
屋とるなしきん美の夜の月

廿六日在原寺梯本寺 人丸環と木像の人丸

おもしきり

雪のそこれこと染は筆にうきぬりと
りとりたらて強りをうる紙

道をしらしくある女をうりつくそれなれ
昔の法に升つて升つるなりしよう毎
し升のもとれとしへかるかるのこと
強まるいそれなるかるの田つくと行
てあるのやしろと稱して

伊く花りたるまたまたまた七十ふ
ちかれてあるをふるのゆしたる

とあるしかん

紀色

分る結し本をかくしも由とふるる
あしたはるるれ　ちるれ中は
内山まくさしくあしとやそ紀長岳寺
釜口と寺を
堯源明王　よ　みもむき二枚とあるしまを
此ちるの外護柳なとくやさしくなさまを
如し　凡浮屠は桑下の三宿とまは
さゝれしも柳なとそ手枚とも　ある
まくさやう架とは　はしは　行を枚乃しら
音をかゝ二六時中　愛源明王の不退の供
養護持のちうを　をれもし

星くのさうれくるしとおさむら外
蒲のくらぬる名さへなくて
廿七日　本堂にまいりて
愛源堂前巻繞松ヲ　方池亀出テ水溶々
忽除テ業障ヲ洗ヲ煩惱ヲ　十二時中不退鐘
又寺よりつゝく和に入て柳本範堯とい
ぬ屋さしいそおそ元々り
廿八日柳本太神にまいりあれし川と
流り桧原大御輪寺にまいりしまを
寺のさ海うれしくよのつ縁の作りを海
りあらせくさ玉なとゝ　ぬもりひをはく

桜井のもとより高野山ゆりの道をわかる
る坂不動坂などいふもさかしき谷あり
右は春のもえそむる若草どもの見ゆる
こゝにけふは雲とかすみにつゝまれてもなびくし
家見えていふばかりもなく根のもとにひたとならびては
ありけるも夜へつゞきよりうちそとの道さへ見え
きぬ。かの家二丈あまりなるの家並になれど
ともし火へとりてともしてゐたり
三日の夕ぐれ遍照院にいたりつきぬ
あかゆきいふなるとてこの寺の勝景ところ
ひとつ奥の院にまゐりて御廟のみあかしや

宗祖御とつ遍照 あさましきおもひけ
るまいるまいまゐりてさき心ふかき大い
なきのあはれなる利生のよしたふと
ゆゑにはひひとしらずいまさらに灯
籠堂にまうで大師の金珠ぞ結び傳へ
大塔諸堂結縁して厳かなる弐十
こゝろをうつしきゆゑまことにも思ひ
出る一度参詣高野山六般若道中ぞ蔵
の記などあはれなるに二つとせまでの結宿
縁わすれし哉

横嶺縦峰不厭登 衆人攜手又支藤

わくこゝろ也 此ハ入ぬまハ関屋の花ハ散く
所をのこりちる所にて花を若風の吹あ字
ゐる世をれましらさ海也こゝ里ハはてのの
夜社りまくりゝ○の鳥井目ゆらゝ紙
そらを多紙の額あり字和わきまへさし人ハ
といふれを發心門とそ申字ハ入れて行まらは
一里をゐまふ今をさりなるを風の木も散
をしてを思やすしまもきしふもさ是
そらを壯観とは見えし電源廣塔までのわり
ゐこれをこのあるまハいまゝ桁とをさ紀あ
さるしうを又さうりの木れれとゝ思まく酒

をしを辨のゐらあれいよく花をいろを
ましゐりいふ所ハ云もよゝゐ無きよし
兼く申ひしを中くことさまし所ハ也
よく哥心をうせそ忘
こゝろそしを花りちるはよくこむと
申ふよゐるみよしれくやや
此あ雪しかを

紙色

まゝをちまゝ所ゝのかをふうき
よし野ハたゝのとさを山かね
あるゝ家をこれを志願まく花の木もうへ多

行ましの父ゆゑ人さ給ふ事なりて龍田山を
多松のえらん給ひ其ゆゑ菜甕とつ事
やうく松のうつり染松かされとゝあるまゝ
蔵ゆゑ薪ひろ給ひ菜具なと異ある
物とも酒肴さまゝしきゆゑ給ひ其事
あまたひ盃めらる茶なとすゝめてこれ
信貴山にいるゝ事福生院とゝもなひ給ひ
毗沙門につきて其の節も多よりあまたゝ
本堂にあり松ゆゑを御ゆゑ三方のうち和
歌みて勝境ゆゑ是ゆゑ河内國
八尾本の金剛蓮花寺とゝ寺給さしる事

つ給ふ事
十一日を過ぬ給ふ人とそ申ひ立けるゝ
人のいる御ゆゑ此八尾とゝ本そ鷲の御池
なりよのつ〇のは尾十二まい出さなれ事
此本は尾を八ゆゑ孫をもらしゆゑ
賀をきくとゝ此きゝん宗くゆゑの
八夜の桂八手とせの粉
とうさ聞く是より神廟むくの木れある
寺より出るとの木乃りとゆゑ本堂へ
まゐり太子の御歌開帳はなきよしうる事
しかと案内をれる人起れうに申して起ら

歳の雪

魚さくとくとりまとくむくの水れ
むくつもれまくむかふ雪を

紅色

伊かし魚のあとも本なき中とても
弱ひきむかふのとり草
叩きて住らしまきてそりはよく晴く家
諸の人と神とつゝ祭松原ちかしこさう
もと詩うゝ元んちよりしこれさまれ
そしれんかくと元く男女貝かつてせう
ありとなり先人多

なり升すなとけり寄し海人を
なりんくゝ魚ゝ住しのうみ
神のなりなくそんなり住ゆえの
きし方の月はこれわきまな

紅色

よりそれをまたはきる金住の江や
なりき嚴しし住金かなを
うれのかしきそちうきれ鳴り浦りひう
まく天を寄はおもむきてこれ為よりも
なくなれ伊かと覚えしとりそういまれ
別當ける大覺れ内なる野路升といね

かゝる其間魚井のあとまゐらせ御帰
の程より本乃とく出来る事又本
舞ちらさ乱りくるを続けしと續
きくまつるに御見いさしかるとちる風
こ御見しと一程の間に御ゆるせなく
事なとちるまゐらせ候のつきある
よし語りけり秋野と云人道まゐく
とくるまゐらせて梅の花まゐらせ大江まゐ
酒とをしせくさけ川乃ゆるまゐく
数盃とかゝまゐけさしまて夕はゝ山さま
ゐけせるまゐりけりいまゐりものとまゐ

和漢一折まゐ程にあるしかん
雲やいほ山崎かく花さくら
逆宮燕談春　水無瀬三位
あれりやれ人の意をなくん
十三日早朝に御歌堂しまゐ祈望男
山八幡りまゐ帰るさ秋迦のおりまゐ
雲まくある人酒をしゐくうゐ此ゆるの
梅のつまれ人心ちあしくてまゐ
くれしけり
十四日こゝにせよりまゐ帰よ帝望たつ
しれ春のおりまゐ

今生の宿望来世の結縁内足さらにもれ
なるを

石やま月ゝ乃記

同

去年乃頃比源氏物語の事なとこと続の道
ゆゑ聞しるゝ八月十五夜石山寺より
るゝかの式部ゝ筆をとゝ事し昔れさて或説
なるゝかゝるゝ事ゝこゝあゝ続通夜し
るゝかしこの月ゝ待ゝるゝやとゝゝるゝさて
よおもひこゝ俄にし法楽のこゝめの名字
をとりしてゝるゝ十五夜の事を続く聞し

しとさまゝ事あつてむすしくさし
待りこのこゝ紙令后なりし給ひ続きて
出ゝん事語あるへきよしあ聞もとゝ事
このゆゑにあるを遊びて蓮屋に日と
ゆゑしましるゝ続中一部の功をしるお
はしはしけり又宗養法師紙巴法師に
続も同聴のともゝ続るまゝいさるを待
に行ゝるゝに日紙をとゝんもゝしかの
源氏の月乃あるゝ十百韻の連歌
をとゝ聞しゝ不堪のこゝ老懐いりし也
おもひなるゝ驥の尾にしり続く風きよし

ことゝ川蔭塔の光明もそひきなることを
みしあらん日を一日逢為まへきは
中ゝ為世号院まく百韻の事頼あり廿一日
和まく還向し侍り永仲具遊とり
まもりも船よりあり事なく為りあるを
こゝろゝ為法をしてきらまれたりこと
を感者必衰のことゝ是乃く感し
あ為り

詠十六首和哥　首題名号

な　なひきあふ草乃そりとゝかつみる為
一柴のこゝろ秋さんを つゝ為

む　むしとれなまもとあ雅の小花りら
ゆやかうしきとる咲まきを
よ　庭つとりなく聲ハあらつ家の
ちゝき為もや涙なるゝ秋
よ　夜もはゝるゝなるひて秋毎の
おもひとはゝ松出の明く
い　ゆるまさむ月なしとて光秋のうち
こゝろすゝめる夜半乃小蓮
ま　まんきんと見まゝる斬の古事ま
さしいれ月のうきれくゝ為なき
む　むしと雲乃ゝ拾る月のおもひをや

む　むらさ紀の色をつし武蔵たこうま
さしけ　ゆうと申ふ和へうか
ふ　まかの海やこよ紀の月まん光アるや
私の家ゆしを宮りしたれん
よ　よ乃かなり紀りと紀もくさそよもすう
うち紀そうもうき私もかし
い　行ましへ乃旅とるかくさむ水の
なうまのそ忘とうそうれそむ
て　アうあんの花野とゆきに麗きあひて
蔵かるうや秋もかうそし
む　むまきに私になりてもそれ此くさに

あもしくまもそ紀ぬいろうか
く　くあと秋く侍えしへそ秋ふ花
ゆかしふに月やそれら秋
わ　まなのかな音まの道のいしゆや
しうへよ紀ゑへちひのこ
む　むとむの夢ゑそこのそこうるを
孫り姫佛しとあき乃よかく
せ　さ紀そ紀くあくに月りとまに花
私にさうきのきく乃しうれ
を　をとそひく吹ふう浪もうらいその
そあつたひゆく秋乃あきうせ

む　むかしはいまとはいひしことをもいふ
さらすみわたる月ともまちしや
か　かへるさも菩提もまよふ心かな
うけかたき身の月のむかし思
は　波路くらく峰にまよひて帰るほと
ちらさてさそふあふ坂の山
は　はるかなる法のみちさへ梓の
しらてもつねにきこえくる浪
このたひは世に流くるあかつき発句に
あをしらぬ
みわたせはなにはいはれし月の秋

廿一日岩清水みなみ所にてあそひしに

峰の松や有明浪きこえての海　令后　大覚寺義俊僧正

宗養法師

な　なにはえやきくにも川の瀬ひとし
久しき世まちてこそ月をまち
む　むかしの春も小倉の嶺のむかしとし
いつか川御法のあとの山
み　まれひとも色ことなりいはくいを
くれはのなれ筆乃一筆
よ　夜ときし我をまちよしよの

なれはかきまれて頼まん
は
はるの世とうるはつまれて蛤蛤まん
いし山ありさ寄としり早寄
紹巴法師
な
名殘あらんかぎりなり聖はいかるさむ
まくる花の紬のいろく
む
むかしくはまれあるらん山のくや
このうち秋の花ふ菅の面
よ
まはかまも音あるまくしく成ゆくや
野とき紙さそ梅の花のうち汎
よ
なやそくまれ折くそくん麻乃言も

扇にこほりて聖人の新うえ
い
石たしる湖のひしきも露紛申れ
ひとら梢のまつう労りぬく
ま
アラ乃こゑ見えて見えしくのまゝぬるや
月も春秋の雪
む
むかひ山ひ紙ありの山をくなれ
とかるも月のうちにてもめ
く
草のうへにとまるる扇のしろ色と
くてくたるのまん乃朝風
ん
けるかまもまれてる海のうて松れ
月かうかる とら見 山く

む　むすひまゝ人しうけまゝ私ふうき
　　[illegible]の庭に[illegible]なりけり
せ　関屋より[illegible]出る袖のいろも
　　もみちなりけるや[illegible]山
を　をしなべてこゝろの色に成にけり
　　私の[illegible]の[illegible]植[illegible]
む　むろの[illegible]あらいき[illegible]行ひり
　　[illegible]なりき私の[illegible]
か　[illegible]明[illegible]の音聞[illegible]
　　ゆく袖[illegible]熱[illegible]
は　[illegible]へ[illegible]下[illegible]や

　　[illegible]私の[illegible]なみ
ゆ　清の國乃[illegible]法の水を
　　ゆるしなるもの月のゆくまゝ

留題皓月江山一覽之簷下

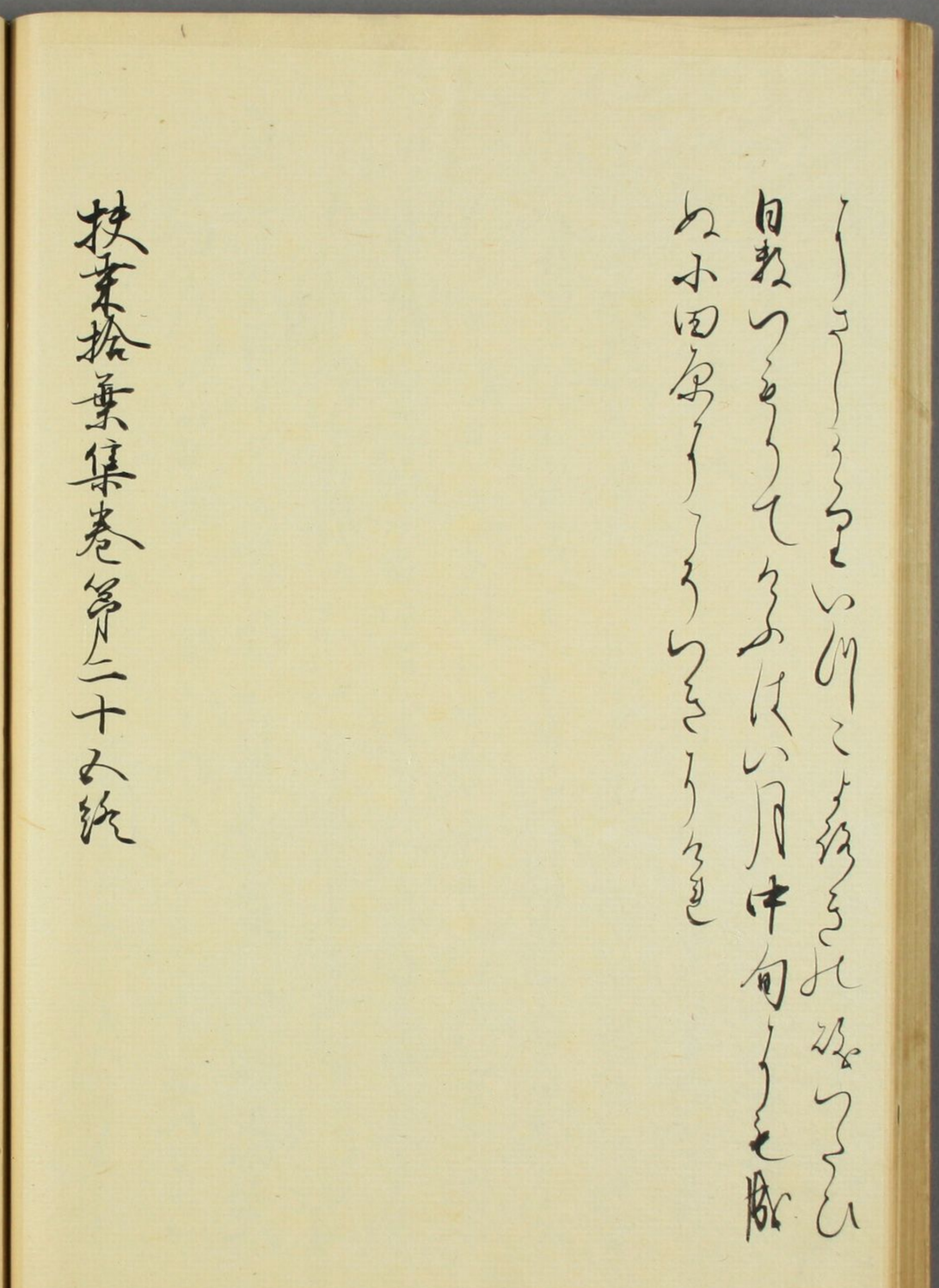
月明皓々夜沈々　去此清光何處尋
不換三公子陵瀬　江山一覽主人心

金后有尊和

江月水流昇又沈　江山一覽不勞尋
秋宵對榻共閑話　塵外相逢世外心

むさしゆ紀行

平氏康



よりさしかゝるといふ所にて[illegible]れ[illegible]ひ
自教いまりてなふ[illegible]は八月中旬よりも[illegible]
ぬ小田原よりしきりなり

扶桑拾葉集巻第二十五終

扶桑拾葉集卷第二十六

目録

永祿頌合跋　藤原資定
書誠心堂和頌序　同
桂林集序　菅原実枝
百首和頌序　同
心珠詠藻序　同
清見此記　同
祢名浣右府七年賀記　菅原植通

長源院戒いてめ辞　同
嵯峨記　同
雅春卿戒いてめ辞　釋道澄
昌叱といふめ和歌序　同
光源院贈左府追善二年雪和歌序　釋義俊
かゝ誇乃和の記　無朝法親王
九州こゝろ記　源黄孝
闕疑抄跋　同

夏想記　同

扶桑拾葉集巻第二十六

參議從三位兼行右近衛權中將源朝臣光圀編集

永祿頓合跋

藤原資定

此一書ある人乃さらるれとて先りよ里
雖波津れよしあしとまれまた曲数鳴乃
れ志りかなり志源れ卑朝とくえ給る
事ゆゑにより法をもとめ定をうらひ
ゑゆくりともくれ田津海をたれまま
て給ふ曲りよりひ七十れ志の浪り志
川みぬ里いあしたみもくく事も名り

ハ跡なく忘れてさまかうくらし閑行と
さとるんら侍ましは喜れあり四れ人をつゝ色
をとりあを見るまゝ人へき事ならねとさす
うりいなを乃いなを見かたくていけ河乃
いさゝかふれれかたりしとさるしつを侍るす
名れ冥答もおそろしく明くへの人れれ
もちんもたれりしてて汗都さそまりな
きことゝこそ侍ま

書をいて先輩和歌序

同

すなかし明ら月乃たしめれこゝろすや細君

世をとゝやうさしかれあかけりし名さりれ霧
神に行まり世をあつぬ行りひ乃あぬりむ
よみちく世をれ玉れ愛こけくれしわさけ
和しけまれ以ふしへ乃人をいけるなれ麻に
祢世和まのかるしこれ行りひあれはわかる
新道にいかまほしき命をかこつこれこるいりせ
れなくひけるき世乃なりなまは憲慕
の明をなきんあるなきをも今けら明らぬこと
ようそ行ふうなれ明らりし乃姉乃日かきをも
ほとなくくまんそくいけしかとふれすかこし
なるぬけれ見玉けの葉なれ霜りひかの

ぬるゝ迄とり稱の神のみくさそそとをいつり
給ひしこの此の世乃けんきゝ志つん所く
て姉の葉乃志ゝしとはさりしもほいな
所の事なりしに於の夏をといひ所をきやま
さばとてたゝらけてもすなにけるかと
匡房ゆゑも諭給ひしかゝ有度須乃かと
りしとこそ申りれほとも芳野川乃よし
や世中と持ひかゝし川そのころ悲歎我
なくけめんかゝ筆に御をくけらきき
しゝ首の鬼礫と藤塩草こゝなつら得て元
魂乃餘氣をとゝめ御といふこと志かれ利

行すゑといひにその紀く夕霧乃
ちきりはけるかな身と名成ぬすん
世をふ物もうまし思ふまし思ねを
うへおなしひれ者ふりなりさは
見し姉乃三れけるこゝに就るん
なき人こゝ宿乃しる我く
毎くひなきんこと葉とそのまゝに
乃こゝ須すれけれ志もうか

桂林集序

藤原實枝

雀海とうしこゝ世代をまきを西をたさむなこ

数れ得ぬよりはよきとてときこしらへれいまゝ
此集の事をもそれんひとしうるへし仍て
数百それ中より嵯峨山の暇なきに其をみ
るきはなく類をわかち部をたてゝ紙をつくし一書と
なしかへるれ月まんかつらりなそくて桂林集
といふかきれい一枝の外より折のこゝろを
とつれ紙れ得ぬきこゝろみあるやうなれと
みてるを闕ことは天の道より言ふかりこそ
と志らふ

百首和歌序

同

天て教神の御わん代にこれ書芦原の中
川国をたさせん給ふんとて天を孫のみことを
くらし給ひしに先日向の国高子穂の宮ね
小なりしを給ひ神代のなりしをそくに
の御とりをとの志給ひしかれはいまゝ国と
を御まねらすや御りかん人の代とあるを
東征のちからを法くし給ひ年かさなるを
うわの法門六十餘州は御をかなれ
ちし給ひしゆへにや西の国は人のんも
さとくかしこきためしに於申し給ふ志らん
御をしやうとこれ兼は人麿の事をあれ

うとみゆうこと葉のあやはしなりてつめも
うらやみぬべくうれいてそうをあんれ也は
立田姫も乃ぬきてやあるんやまちとよ生れ
なりうの天才とえらうんとうくよこ世今れ
世にくらんよれ又誰かとあやし代まてよ
そ見ぬかりかうに法三すくこれくさくのよし
行しを代まへかれなるんハかこそらいこかれと
うくしうやすらひなりうよ代へしはみ仰
よ吟よひうも奥よ楽するよやそうんも
うらまてわもふしたら次拙点とうやいふな
ぬことまなひかぬ仰りかしてもなれ物よ

感すうんの世くさ里りうよや嬰児うそうく
辛りんやうに鼓りむうれてあさき根さし
の百くさむおうへはきくいとて老のくら家
花をもこうて玉山すり瓦をかきうれ後れ
ぬしりもはしましくなん

心珠詠藻序

同

ほうふ面紀寶をおしまほ世をもつ面き國を
捨て佛の道有いれ人れ又夫の人かへより
多めしかかう徒とあらて此世有れさるや
ありきん末の渇こりえかさうれ里うしほう

おとし入道前右大臣七十の算を賀せし
めむかさめ七十首乃和哥をすゝめて彼亭
ありて前人を海ほきよを海頌をしめひく
に萬歳を祝して一盃を勧め漸酒酣なし
て檜中納言為益卿姉ところより十首乃詠
哥を出り出して遊宴乃席に弘む田とに
又條三品乃長生の事をめしもひまいくぬ
へきか乃苗裔ならんの人に問しも感情何
ぞやや入道前右相府答和何りしかや柞
山長明の事翌日に紀しかし一續其
短冊御覧をうましに七十首乃ころ浦月

乃愚詠濱松かえに為ようを給く御製
ふまふそのみ松乃しの繁七とをと
いく十かへり乃起に問かすし
となんかく叡慮乃ふしけふきこと入道乃
とを問ふもいふも時にあらりてめいほく
のいたり打をきこゝろ
君か代に起に七と歩十かへりの
めくみの多や松にのみを明ん
とかけるに入道前右府も
よんひ乃ことはあふ事に老鶴の
ほかへしなりし雲井にしるふまゝ

かくて日かたもうけうていくとせけれ
屋うにおはえ行きしいけも見るまし菓子
とせれ筆紙ひらきて見侍けまいあるまし物
てかく夢想乃奇とて
三千年りのふにはそ内は光そ物
君かきてうこん男ともとるまき
とありきれを安乃うんりとおてあるまり
かゝり但て木おれ解を綴仙なるし
水乃泡れうしてある男とおもひ川
そえぬさ後そあれ世れ中
ちきうこそかきうありそれもゆる出を

おくく紫りつけてしるへ見
とせ清る紙とく内ふうを打ふ日れ
ゆるのうゆるふ男とそくるしむ
せ古紀あへ神れうへふそとれそふ和
老乃なるこふ秋くされ清地
ふ庭れおもり枝葉紙なるおもうけれ
葉ありも来りもみゆえうりや
て手紙たゆえいてかそへん行乃手れ
後れめくみれうれうる紀とい
に濁世乃中りは人乃寺内れ徳を
なうくとんうわおもふるなき

まりくしとありつくくらゆく月の
心そらくもなきんまてるそう
すまつきれ三代乃日うちとおよびて
三様くむすてうつゝへりけり
天正ことしのありけり二とせ秋かの月の
はしめつかたみすひありまして筆よ陣する
ものなりし

識記

同

世よ寺川ふらふき翁ありけり天正之年
志うきの中乃十日ありけりやまと国立わく
あられえの四方をみまもりて待りて信くし
あまよ寺あるうと思ふんありいさらるれく
松もほて出切よ松乃むらきしみすうるまて
婦り雨まてとも宮代八棟作るる小折り
まうるみてさてる小野社壇ありと思ひい
けるまゝ蕾つうしるれ寒夫乃雲ゝも
こゝろしれり松風乃音えくしらまさ
こゝろ神さひて行取てあゝんまうるひ
侍れ

吹すゝむ声よきゝて九重乃
和歌乃あとありし松の梢のまた

自是花中巢許輩　人間富貴不關渠

窗前東嶺到青陽山下鐘聲送景光
我觀世間巢許輩一枝花亦是孤芳

さ川ぶりにかゝれ世にまれてに
くらもしくもとゝあるつんを
廿二日後鳥根院りなりける
いふしつゝにふ院りや水無瀬川
山りとくすむ者はまたにけり
廿四日鹿宮山雪乃うへに雪乃うへれを
行こむ山ゝあるくもかゝれ雪乃
移るゆきにやきえとあらはしに
廿五日天神りなる
あさくらぬんは梅の名も香も
むにあられ此まそ有事ある

法然上人元日於二尊教院也雪乃寶樹親乃
雪を論し給つゝ有し我の御新のおよ打
しも梅を範頼りさしけるを
梅やはふいふ事ある佛乃法王より
こゝ給ふ白ひきつゝん
恵雲右乃勇より頃乃下の歯乃ぬ事れを
いたひて
ふゆしまさ古ゝの蔵にかゝるつゝ
みとりさらそひ雲も暗つき
廿七日東梅寺に晦り侍りて入堂せしに堂の
ゐるを

我山とさかしとおもひとかくこし
なれなくて春なれしらくひおう
きにけきのうしれん乃は梅はとくらはるを
コト他乃はとうなるはつみまて
りはまりはひと旦ふ梅かん
文古乃人ハ梅をくらはしとて
山里ハさふ人そなかに冬も香も
見れとコトすむ梅はひとは

紅白梅花 招請諸老 二月廿四日

招得高賓興最奇 爲梅幾度要題詩
聽鶯莫作杜鵑去 紅白花開春一枝

うつ浴りは梅にはとうはれ乃
まりひはいかく梅はしるゆ風

洛陽見花 於永明院光明和尚興行 廿八首アリ 天正二沽洗十一

暮捲珠簾見白櫻 詩翁修得舊時盟
洛陽司馬約花否 吹有清香慰老成

右題まて梅花 月口靜 無まさかせ 今や風笑
なりて いつも詠む乃んとしらく
あひはおひはあ花乃所を久しさは
ことの井の岩乃風ふれ世に
春夏りくしく淵あそやまひ乃中は十日
乃はくらはりるに花につ事ハ三条大納言

蓮

あかしとしふんたはこはひりなよ
池乃しらしの花乃朝霧

蝉

きみ和あきかぜにしきりにむしろ毎の
よそにはあらぬきりの花さ

遠恋

何毎なれや音つ絶そも八百日ゆく
須乃海さことと中乃かよひら

神祇

あふ事をしらしに海に玉は沖

玉川こうみ和めらみあふ世を
於二条殿下亭竹契追年といふ題にて当
社あり右亟相りし家業をゆつまく和會
なれば

家乃風はたへてしかれ竹乃
もとなれはよりしか世を毎にむ

九月晝

蕭々竹秋乃北山和第も木も
うつ絶ふ日ゆかしかさらし

雅春を以毎先輩

釋道澄

つ 月前ハ[illegible]ハ[illegible]
世をしつゝ[illegible]
さ [illegible]
ゆゑ来ハ[illegible]
う [illegible]
いとゝぬ[illegible]

昌叱をいそめ和歌席

同

昌叱法橋ハ[illegible]耳[illegible]年[illegible]
[illegible]
紹巴法眼[illegible]

[illegible]
病乃床[illegible]
[illegible]
連寄[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
昌休法師[illegible]
[illegible]
[illegible]

光源院贈左府追善三十一字和歌序

あつまをのくり討死したるゝ三郎に給ふ
を給ふ事何らしと相同しこゝあ給ひ川く
いとみそらひ給へ給ひちらう乃ひ給ひ候
御服をめされ給ひ候ぬきいふ

五月雨は霧の濃の深とも深
もうかをあふ事よ世乃人へまく
也御自筆まて給さ給はるゝ事を知より
人給いひをさせしも月日つて秋乃ゝし
川なる七日給ひ給ひ候ひ候ひ候ひ候
かまて荻沢山清浄光寺他阿上人に逢多
てまつりて此事を給ひ歌き給ひ六字名

号一遍法十界依正一遍解百行離念一遍
諸人中上に妙香花乃七言四句給文の頭
字をとりて六十万人変定往生と一遍
上人のまゝめら給ひるとなんの給へたり乃
御諭を毋一首乃ひしらよを給て申ひ
を述て称ひ給ひ上京上生にいふり給へと
り

さ さ字はちはものとはかのくしまふ事も
見給ひ給れそふ小藤ひ
こ みたまといひてこそしへは給
まて給ひ給ひ候乃妹ひ

日吉乃祭禮も昔禮ありしとなれ乃
やうに槻をとるつ禮志賀の御乃神幸も
例りあるべし松の御とりに神輿の御
船をなるへ清侍るとうるへ等なる管絃乃
あの孫さへ浪松風にきくひていとたう
かくるん侍るされを山松いつそや乃大風に
きこ禮くるいうも御ことも御ものは御幸
乃神感もこと終めるやうに世にもいひあ
へ是ありに新兵後河内を頼とく文武世に
きくれ又常もその間から侍りきるへ行り
さ禮るるや大津乃御城部をあつ字給ひ

禮しなり甚ならかうに松菴 東玉 雜齋 直要
とくあるり何里ぞ乃みれうしろ見まく
おろい禮しり彼松の年よりくやみて
弟乃雜齋いて載るやとく歌中のもの
りいひて風情あるに松をとかくしらず
られしにかうしてほりおくへら禮
めくりより埒ゆひいかほ見にも字にくし
字禮ん洛来乃人もめとも見ぬなにはとく
所し平時吉正十九辛卯年燥乃もしん
もぬさとりうしみなるへしてもの禮う
中にまゐれ

とのつかう年も過ぐしかう候乃
松より記りをみる記なりさは
と叩ゐ御に松を也やうもなく生れつきく
者なるゝ猶も今つしほ乃みとりまてち
とせ乃根さしいちしるゝ紀事神急なるさく
見て御望又或人に松乃来由をたほむ事
とつてゝ乃うえ大津宮（天智天皇御宮）あ先乃御門と
かや申みかといまとりて大津の故繁栄斜
なるゝして今乃三井寺も彼法門乃勅願
所として法名の所に三會乃曉まてたゝ
ましき御誓約揚栗なりある時天皇から

諸より行幸ましゝ海にふ沖井より漁舟二
艘さほさしく来れ御門先と近つ寄て
これ乃ましを厳覚あれて二人の蓮なり
（二人名あり神秘なれて不載）御門詔御ましまて蓮も神変奇
特現しくかくらゝ
大体乃三川の演つをうちさらし
とせくは浪の所来しゝを
とく船ハいろいろあらんとも見て須則神院
まて山王乃御神と叩ゐ星霜積りて
とせりあまれり今も祭礼ありかゝ候まて
栗飯乃御供なとうなふ如もうれむしゝ乃

其七ヶ面風あらき所に如くより私出城雖ゆへき
よしと私人中傳もえさいたつふくさんも
ねうしとく私とえ浪乃とまちまりし傳へき
よしかして杵藥宮見物乃ゑ先ゑうしく
きとう行道乃往三里いりゆ金く本ふく
て正乃ゑしすまねゑしなるぬ社をとんかうて
社イ
神人と見えたるに君傳りしうれるん佐
役れ大社なり神神いさなきいさなるも乃
見ことしへけるに志りく物語し傳に日も
しけ面もいくしまもえ衣あふらんれ此年と
ゆもとめくとしまりぬ

千早振神の國しろや三地と
わうち物つる國のみりしら
其ゆり佐治と出く秋庚と云所まて湖水乃に
私に乗く平田まてもりに生浦なりと私人
のいふときて
破まくらくらくやあふのくし手ゆ
見えてぬ夏のさむなりてり
やうにして菅ゆるりしにきつき乃社に
至く室前とりしめ末社等ゆるにかなる見
めくりて君ゆるに尚社尚神司千家に傳僅
も國造となんいひ事ゆ其事に見物し

先年連歌乃一巻見せしまゐらせしとかゝる
見ゝ中出侍しに五月三日發句所望とて其歌
ハ百韻をつゝね侍りしぬ
浪の聲ありしさらの時 志けり破を見るな
五日出船すゝに行りくも一打絶りしきまし
そ發句所望なれば當座に
うき草乃孫りひきまりあやめ
十日濱田と出しきりに高角と云所なりと云を
乗り見聞して石見かたかの松の末ゆゑ
うき世の月代見えてぬ所と人丸乃孫をし事
思ひ出しく

うつり行せしと色ぬまとくらもせぬ
名にそたかの松乃ことの葉
とくして出門西にいたり破の上海と見るる
してもりに明り侍しと云所をしけ作も世乃
世常なる事と思ひ出しく
みな人乃いのちなのとしたのめとも
世ハ明り志内乃浪のうるゝ
打すしな岡海小畑と云湊り唐船の着て
みなしと船人のうちに明りけまえさハ見
ぬせんとて遥に乗をとよせ志えしとめしく
我もまゐらしつゝひしてさきとめぬ

まけおえて同西妙業なると云にとまりぬ侍
持乃和尚出しまゐらせ給東佛法の物語なと
ゆゑつとめしくのあはれ出しく行とて
明るちなき夢とてふりのとんかれも
法乃むしろうちてこそ志を
心法無形通貫十方と聞るんいへん思ひよ
まきこえかしくや
豊浦宮と引るなとて
水をしぬ池乃ふかんふさとも
とよらの家の法みよそ志れ
たひと云在前にてうまいひくひ侍るんとて

うう乃風とうにあらなとて下にあらぬに
海めのいてきくいなきなといふとこそ侍りて
さしいまてあらふる河の北まゐ知りて
るたひとや人乃みるらん
関の海にまゐて下侍後なりし侍るに其かゝ
りに寺を和乃人は内裏となるん云法之侍る侍に
案内して安徳天皇御新を外平家一門乃
像を見侍事なり後侍者今の短冊ると見せる
もしに知るる人乃事ともわりしれとも
をしかりしとともぬるまゐ
すゝか乃海の波のなとうふ

豊前国門司乃関にて
たゞしるしつくやらんてふかくも
きゝや疑はんもしの関守
兵粮船おほく漕ひてたまとみえてくるに
長門周防国なるハ
米あまた国々より運ぶらん
あけても漕むくるにそ有
豊前乃御浦君として發向下知せしめり
是國の山くらきたる早苗にて
同月廿六日赤間関と出て行ありし君に
しもや漕風のあらき故小倉とゆうて泊る

歌を学ぶ事なるひしてや筑前箱崎にし
て行より歌人の心まかすん今の浜路いふ菩提
と求め歌よのまゝきゝうけたる哉くれ
猶して今よりも云日和らきし時は難波の
とみんゆかしくとうに勅撰君下に今をし
云字を書しくるして見てけるも緑めくしもの
御こ在らゝ歌よ俊り宇ゝ治まり万葉
よ我いゆるま須志ゝのみすく神と此後ん讀ら
事にと思ひ出て
葉ことば日の心の流 浄と行あり
かまいとまんふつきしとの蔓

かたうへしとて發句を書けりして入
韻不申さしは
風ゆゑ南をまつのとかそれ
社同六月梅
同八日利休居士へ関白殿渡御ありて志り
法如御ありて後一杯と催さまして發句は
うまつるへきよしおもひ笠岡八幡のんを
神代よりもしらんとしし松のかせ
雲るなりとをさ夏の秋荒月　松
不のかふも明り元の面をれく　日北新刻云
箱崎の八幡のうち関白殿松まし御ふなりて

名家をしはしたるしのまつのよよせて祝言
のかを名によりませけるは
清きをとはしたり此さゝよ箱崎荒
松の子とせも君か代の友
関白殿箱崎の松原にてすまるへきよし
あて名臣見せしを志りし法越眞のるゝ
松ほきまいり徐とも見て法尚居たしは
立出れそそのみなとれ夕しを
うしくかしのうら風そふく
著りてしか色しせかふれりは松原は名所ふ
家人をつかうまつるへきよしおもひ

六月廿五日一折法行をへしとく海に大
炊元所望なり
浪乃高も秋風ちりし西の海
何まさうれ見るの住ぬと思ふるよ
とりあつれ有しこき世なるとや
と千家易よりいひとこ勝げる返事は
あ月さうひなれ行りぬとむるさ
とつこもゆるしこゝ世れまとも
廿七日関白殿花瓶あまたとり出さまして草
花といふ事れしる法度殿にて俄に一折縁
されて殿内法ゝまつる無きよしあれば

夜草より花のうるはたりとうれ
すしき秋里乃さこうも四月　松
志ゝ殿の麓のひまと待ひきて　由己
七月四日関白殿罠の後より御陣なり和にて
糸陣をしれしふるなるもなし和にて南の
海とみんめくよしむと定め待ちり秋の日
にあらくなめ出和なりて六日まで返事し
待りて思ひ法学待りけれ
あまたつく法や世ゝ殿と御うる
六日ふもいまる和の出りしこと風なきは関防山
口みん物のこめ生前の荷をれふるより出して

十一日曉田之上と出て其日は上の関と云所に
私とうけて明行るをもまして堪よひ通
て私出をもよりしかに岩くに山といへ見
やはらく

あしきそれ程なわとても物なきは
完くり正もふとなりしてん

そまよりの巌鳴ちうくなりて社頭を見るに
為所は海の西二町ばかりと行りして
立てり廻廊も相はみな堪りたりてあり
私よりみて

とは鳴の下津 完ねれ完ふしら

波の上よりたとそ見れ
此郷を出て当社高司椒当左近将監うたへ川
うけしをとうくあて月に成行まは立ちて安
まて見るに堪千堪満目の如くうけて
汀二三町いりも重をにかりぬ三川堪は出
大海の泉かれと家紙賢作なり限りなるを
又大野池多政教句不留まて十三日一会あ
里当社よりみれ池と云あれは

新しけれ月やうみの池の多
十四日よりも棚守連家具りまへきよりあ
とも至まつる日にあらまり御法まるなりよ

同

此物語乃抄出年来あらましなるゝ花夷のい
と尚るゝて見くる事なるは此物八条文傳傳法
こゝまゝ引るへきよし如しこれ給ふ故ひく
うを給ふ事給ふふよくすとよめのんさしも
しきるゝ繕されたく三光院内府そのうえ
志るゝし志るへ事しも出器といふ所にて法傳
又あし此抄出物事とゝ尚りしとゝ出て給ふ
こゝ抄事れ嚴命ゝ事ゝ和紙文環翠軒家
光遺逢院殿へ独此せしと推法抄と名付
給ふし即こ書類と此ゝ書と給不足とまき

まへよとたんへりしゝ悪なるんりしかれ
無うにひきあらせて志るし川を給ふ格此
傳義悪雲院殿大学る准佑義俊聖獲院准佑
道壇其外宗堂紹巴なとにいふてこを給ふ
事とよひしと物として悪見肖此本の法抄とあ
るせ此説乃傳ゝ語ひて是と用格せしむ論語
ゝ多此闕疑情云事録則寡むといへりよて
闕疑とをて此抄出乃名とはこんあまもつ事
やゝあらしやといふへきものれ干時文禄五年
仲春十五日に是と物ゝ所なりのなり

蔓想記

同

慶長乃ちしめ給年仲乃冬大坂給亭ようつ
里ゆゑし因し此高の瑠の靈夢を感ぜられ
事行りこそ和歌よりいはく

世とし給ひ玄きうあり給ひ初春乃
松乃みとりも給ひし給ひ

凡昊天行り嘉夢あり昔黄帝夢り美胥
氏乃国に捨ふさめて乃後天下大に治ひ
事彼境給ひしといへり又殿高宗給良佐
とえて國家盛なりし事めてそこ夢の
多めしなり中につきて松は十八公乃名何

里こ給又丁国ゟ夢り感せし赤兆にあら
まや柳住吉乃御神は西の海の遠きさきゆ
ちあらはれ出くちうきさかひに迹を隆
給へり其正乃家物を給復し給ふ給ふ
あらせ遥り呉国征伐乃御ちかひ専ら
なれか故に神功皇后乃三韓を平け給し
時も此御神とに威猛と施し給へりとそ
さ給ひ此秋津洲口乃海波給ひ給ひ
こ海のみしもなひさきさかひなる事をて
此時より行りそえしきりさ紀を拾ふに
住吉乃松より小松乃多事をなくして一本く

りの代とうそくても動節なさうえ自然
なるさほにしたく行うさりなるに下齢なれ
屋し今こ乃事をきたりをつかるなりも
よろこひはきくおいさか筆をうめて狂詞と
まるといふことをしたるなり
信らし乃仲好めしみもあらの紙にて
君か八千世をまつ乃ことの葉

扶桑拾葉集巻第二十六終